

カナダ太平洋沿岸部におけるサケの養殖業の展開と先住民  
——バンクーバー島北部を事例として——

立川 陽仁  
(三重大学)

カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州の太平洋沿岸に位置するバンクーバー島に 1990 年前後から導入されているタイセイヨウサケの養殖業は、地域経済の活性化に貢献するものとして注目され、また実際に貢献している。反面、この産業は、環境汚染を引き起こす可能性があるものとして、地元住民、環境保護団体から持続的に反対を受けてもいる。

養殖業の導入は、あくまで地域全体の経済の活性化を目論んだものであり、先住民の経済状況の改善だけをねらいとしたものではない。しかし必然的に、当地の先住民も養殖業の導入による経済変化に巻き込まれることになる。同産業に対する先住民の態度は、二分している。擁護派は、同産業がもたらす経済効果に注目し、みずからそれに積極的に参与して利益を得ている。対して反対派は、養殖業がもたらすかもしれない環境汚染が彼らのおこなう漁撈活動に打撃を与えることを懸念し、当地からの養殖事業の撤退ないし事業の縮小を目指して運動をつづけている。

これらの状況をふまえ、本発表では、現地の先住民による養殖業への態度、語りを紹介したい（現地滞在期間中、私は擁護派と生活をしてきたので、必然的に擁護派の態度や語りに焦点があてられるだろう）。つぎに、人類学者としての私のこれまでの実践・非実践とその背景を振り返り、その上で「北西海岸」と呼ばれる当該文化圏ないし北米を対象に人類学することの意義について若干言及してみたい。